

# 「生徒指導論」における授業改善の取り組み

城 戸 申 一

A trial for the improvement of lectures on teacher training  
from the class “Student Advisement Theory”

Shinichi Kido

## 1 はじめに

学生たちが「生徒指導」の意義や原理および生徒指導の現状や実態等の学修を通して、生徒指導の理念を理解するという目標を真の意味で達成させるためには、目の前にいる学生集団にとってどのような授業の展開が適しているかを、的確に判断することが必須条件である。併せて、個々の学生が、将来の教壇に立った自分を描きながら学ぶことができる方法を研究し選定することも、講義者に課せられた命題である。そのため、授業における工夫として、授業に6つのサブテーマ（表1参照）を設け、更に各テーマにそれぞれ到達目標を持たせて授業にあたった。

表 1

サブテーマ①	生徒指導の歴史を学ぶ
〃 ②	学習指導要領等を通して生徒指導の在り方を理解する
〃 ③	生徒指導の現状等を通して集団や個々の生徒への指導の在り方等を理解する
〃 ④	素晴らしい先輩教師の実践を学び、自己の実践の参考とする
〃 ⑤	教育相談の意義や方法を学び、カウンセリングマインドを持つ教師を目指す
〃 ⑥	進路指導・キャリア教育の意義・課題等を研究する

サブテーマ選定の是非は学生の評価を待たねばならないし、評価の本質的な観点から考えると、将来学生たちが教師として問題や壁に直面した時、その解決策を探ろうとして本授業のことを思い出すか否かにかかっているものと思われる。

また、取組の成果については、授業前と終了後の学生の姿や意見をもって判断したい。すなわち、講義一回目のアンケートによると、ほとんどの学生は漠然とした生徒指導観しか持っておらず、しかし一方では自分がどのような問題に直面するだろうかという不安でいっぱいである。そしてその不安に対処するために、先輩教師たちが取り組んだこれまでの具体的事例を知りたがっている。半期の授業終了後にこの現状と比較して、本授業のまとめを行い、感想や課題を通して

学生が自分なりの意見や信念等を確立させることができたか否かを成果として確認していきたい。

## 2 授業のサブテーマの内容及び到達目標

### (1) サブテーマ① 生徒指導の歴史を学ぶ

社会科の歴史教科を学ぶように、生徒指導に関する動きを年表形式に列記して、同時に時代の背景を教材に添付することで、生徒指導と時代背景の間にある密接な関係を容易に理解できるように工夫した。また、そうすることによっていわゆる温故知新を実践に移すだけではなく、生徒指導の性質や方法が時代の変遷や流行によって変わってきた過去を学ぶことで、将来学生たちが教壇に立つ時が来たとき、今の学びそのままを丸写しにした教育が時代遅れとみなされることをも覚悟させることができると考えた。範囲としては、明治初期から昭和までを扱い、平成に入ってから生徒指導の歴史は、本講義履修者のすべてが他で履修する教育経営学で学修することとした。

学生たちは、将来、各現場で同僚たちと協働して働くのだが、その共同生活の中でそれぞれの学校現場に合った共通の生徒指導観を確立させていく。しかしその場合でも、自分独自の生徒指導観を織り交ぜて、担当する学級の生徒一人ひとりが生き生きと活動できるような指導ができるようになってもらいたい。その目標を達成するため、歴史という過去を学びながらも、将来のことを考察する意識を持たせ、所謂「生きた」生徒指導を実践していく力を身に付けることに留意した。

また、常時「その時代の生徒指導とは」という問いに対する答えを自筆させることによって、生徒指導観の変遷を自分のものとして捉えることができるようにした。

### (2) サブテーマ② 学習指導要領等を通して生徒指導の在り方を理解する

学生は年齢的に柔軟な脳を持っているため、「もの」の概念をイメージとして捉えることが得意である。一方「もの」の概念をイメージ化するよりも前に活字化した場合は、時にその活字のみが固定観念として頭の中に残り、高校時代までの学習指導要領等に則った指導で培われてきた思考力・判断力が使われないまま「もの」の本質を鵜呑みにしようとする愚行に陥ってしまう恐れもある。それが表現力の低下をも誘引し、学生本人のコミュニケーション力不足を加速させ、その結果として教育現場で他の同僚と協働することが困難な教師を育成してしまうことにもつながる。そのことはものごとの核心を外さない教育からそれてしまうだけにはとどまらず、管理主義的な抑えつけの色彩の濃い生徒指導に偏ってしまったり、反対に、生徒を内面的に理解しようと努め、生徒の自己指導力を育成しようとするあまり、生徒への迎合が主流となり、思いもよらず生徒の成長を妨げることになる理想だけの生徒指導に陥ってしまうことの原因ともなる。

そのため当該テーマ②はテーマ①③④を学んだ後に復習できるよう配置し、まとめの意味を持たせた。つまり、生徒指導の変遷や現状を学んだうえで、生徒指導の手引や学習指導要領等がそれらの現状の上に立って編纂されていることを、学生が納得づくで学修できるようにした。また同時に、授業教材を問題形式に作成しなおし、採用試験の練習の一助とすることも視野に入れた。

**(3) サブテーマ③ 集団や個々の生徒への生徒指導の在り方等を理解する**

学校の現状を一括りに述べても、それは時代の差、学校間における差や在籍する教師集団による様々な差などにより、100の学校があれば100の現状がある。同様に、生徒指導の基本的性格や学校教育相談の目的で分類しても、矯正・治療に重きを置かねばならない学校もあれば、治療の時期を経て予防策を講じる時期の学校もある。そういう多様性を学ぶことが教師を目指す学生たちにとっては先決の課題であるため、本大学では1年のころからフレッシュマンゼミや教師力演習などの授業の中で多くの外部講師を招いて種々さまざまな現状を紹介してもらっている。学生にとって外部講師や先輩教師の経験談などから得られる基礎的な知識が学びの礎になり、将来の実践への橋渡しになる。しかし、惜しむらくは学生にとってはそれぞれの学びが、これから体験するであろう自らの体験の前では影を薄くするのは至極当然のことである。座学と実習の併用の重要性がそこにある。

本講義では、文部科学省から出される「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の最新のデータの中から学生に学ばせたい部分を抜粋して資料とした。そしてその数値を学生自身の感性に変換させることを目指し、できるだけ実学の意味合いを濃くした。つまり、文科省から発表されるデータを見て、まずは「感じること」を最初の目的に設定し、それに続けて授業担当者からの説明や先輩教師の取り組みなどを紹介することにより、学生たちの思考が現状を改善するための方策にまで拡張させられるようにした。そして現時点での最終課題としては、様々な場面つまり、学生自身が教壇に立った時、クラス担任となった時、または教科担当者として授業をしている時など、自分が「どのように生徒と対峙するかを想定する」まで考えを到達させておくことを目標とした。恐らく学生たちにとっては学校現場に入ってから、自己の目で見て、自己の足で歩まねばわからないことばかりであろうが、まずは大学生というこの時点で自己の「生徒指導」に対する信念などを確立させておくべきであろうと考えたからである。

**(4) サブテーマ④ 素晴らしい先輩教師の実践を学び、自己の実践の参考とする**

中央教育審議会答申において、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブラーニング）への転換が必要である」と指摘されている。したがってアクティブラーニングとは学習形態でいえば、思考を活性化させることでもあるが、我々教師がこれまでも効果的な学習方法として教室に持ち込んだ学習形態に名前を付けたものもアクティブラーニングと呼べるであろう。

そのためアクティブラーニングは様々な形態を含んでおり、形態によっては教員がチームを組んでプロジェクト形式でやる場合などもあり、学生、指導者、時間、場所など授業のあらゆる環境を考慮して最適な方法をとらなければならない。すなわち講義者サイドのアクティブラーニング実施の強制観念にのみとらわれて、学修者がやらされている感を認めない授業では、まさに本末転倒としか言えないであろう。また、教員による一方向的な講義形式の教育を避けるために取った方法であっても、結果的には教員と学生の関係性が希薄になり、教員のかかわりが不十分になる愚を犯すこともある。「自由に練習してください。」とだけ言うコーチの下でのテニススクールには、誰も高いお金を払って通おうとは思わないのと同じである。

アクティブラーニングの目的は能動的学修に他ならないのだが、同じ音を持つ造語で言い換えれば「脳動（のうどう）」的とも言える。つまり、コミュニケーションツールとしての言語を介し

て他者と意見交換をしようとする、自ら考え、すなわち脳を動かす作業が欠かせないものになってくるからである。更に、脳を動かすためには目や耳から入る情報が何よりの出発点となり、導火線となる。講義室において、その情報を学生自らが入手できない場合や、できたとしても学生の経験では数や量に限りある場合は、それを教員が提供してやることになる。それが教員の支援と呼ばれるものの一つである。授業の中で見た文科省のデータは教員側から提供された情報であり、その情報から主体的に課題を発見するのは学生自身である。

また、2年次の教職教養である本授業においては、プロジェクトや実習的なものは不可能であり、座学の一環としてのアクティブラーニングを展開しようと考えた。そのために取った方法が、「通信」を発行し、各自が自由に読める状態にして、その中のいくつかをピックアップして授業中に「読み聞かせ」を実践するといったやり方である。「読み聞かせ」を選択した理由は、先述したように教員側からのやりっぱなしの情報提供に終わらせることなく、学生・教員両方向の関係性を保つためでもある。また第二番目の理由として、大学の教員が、よき手本になるかまたは反面教師になるかは問わず、学生が教員となった場合の身近なモデルになることであった。

学生たちの多くが、「なぜ教師になろうと思ったか？」という質問に対して、「素晴らしい恩師との出会い」と答えている場面を少なからず目にする。学生たちはその当時の教師からのあたたかい言葉がけや、親身になって相談を聴いてもらった教師の姿勢やわかりやすい授業などが心の中の大きな部分を占めている。だがそれは自己が生徒として教師から頂いたもの（受けたもの）がそのほとんどである。つまりもらう側の喜びはわかっているが、与える側の喜びや苦労は、小学生や中学生には当然のことであるが、わからない。これは発達段階において仕方のないことなのだが、まだ自分が将来教師となるという明確な進路希望を持つまでには至っていない小中学生などの段階にあっては、教師がどういう気持ちで、どういう方法をとって生徒と向き合ったかなどを知ろうとするまでには至らない。更に大学生となり、数年先にいざ先生となろうとしたときに、時間を戻して自分の担任であった先生を観て学ぼうとすることはもちろん不可能である。それゆえ教職系の大学では、観察実習や教育実習に加えて日常的に学生自らが小学生や中学生を再び疑似体験でき、教師のとる手法の是非を検証できるシステムを採用することも必要であると考えた。併せて、学生が教員からしてもらってうれしいことや嫌なことを整理し、自己が教員になった場合の指針とし、自己に合った手法を大学時代に教わる手法の中から取捨選択できるようにすることが肝要であるとも考えた。「読み聞かせ」もそのうちの一例であり、講義者が高校か、ときには小・中学校の先生であり、学生たちがその学校の生徒という関係で展開される疑似授業の時間を持つのである。時間は毎回約10分から15分ほどであるが、その中で学生は自己の感性を働かせ、通信の中の話情報を情報として自らの人生にどのようにして生かすかを考えるとともに、教師側の「工夫の恩恵」を実体験するのである。更に進めて、「読み聞かせ」以外の手法の存在を探るなどにも考えを拡張させることも本テーマの目標の一つである。

更に「読み聞かせ」を授業の冒頭で毎回行うことには別の効用もある。毎日同じ活動を行うことで児童生徒は生活のリズムができるが、その効用を図り朝読書の時間を設けている学校も少なくない。それは読書そのものの良さだけのために実施しているのではなく、先述した生活のリズムを作り出すことによって児童生徒の精神の安定を図ったりする効果を目指したものである。同様に、授業の冒頭とする読み聞かせによって、学生の授業に対する姿勢の切り替えを図っているのだが、そのことを実体験することが、学生が教師となった時に担当の児童生徒に対しても使える技として定着させる意味合いも持たせた。

通信の内容に関しては、できるだけ授業の展開と連動することが学生の心に入りやすく、講義内容の実用性が高まることを考慮して選考した（3参照）。講義の最終段階において、学生に通信に関してアンケートを実施している。その結果の詳細は割愛するが、学生が求めるものがどういふものであるかを判断することに大いに役に立っている。

#### (5) サブテーマ⑤ カウンセリングマインドを持つ教師を目指す

「生徒指導とは？」の問いかけに対し、矯正・治療目的の支援のみを回答とする傾向も少なくない。そこで学生に強く意識させるべきは、矯正・治療目的の支援という性格に加え、まさに生徒指導とは予防や開発目的の支援的性格も兼備していることを説かねばならない。その意味において生徒指導はガイダンスやカウンセリングの機能を含む。問題行動のある児童生徒への支援や、どのようにしたら問題行動を起こさないようにできるかという観点からの指導・支援、そして児童生徒一人ひとりが自己実現できるように開発的な支援をしていく過程で、児童生徒理解や教育相談が重要な位置を占めることを説かねばならない。

本授業では児童生徒理解・学校教育相談の基本的知識を習得するばかりではなく、カウンセリングマインドを持った教員の言葉がどのように人の心に響くかを疑似体験させるために、学生と教員間で一種の交換日誌を行った（4参照）。児童生徒から相談を受けた場合は、本来なら面接や面談形式で話し合うことが効果を上げるのであろうが、将来担任としてクラスの約30人～40人の児童生徒を受け持ち、しかし多忙な中で、如何にして児童生徒の変化を見逃さないようにするかを探知するアンテナの一例としてそれを提示した。

実施上の留意点は、講義者側が、必ず学生の意見を受容することから始めるということである。自分が受容されるとき喜びを実体験できてこそ、カウンセリングマインドは育つと考えたからである。併せてどの学校現場においても、声の大きな積極的な生徒や、先生に話しかける回数が多い生徒の状況はつかみやすいが、教師側から機会を与えなければ聞くことのできない生徒の声を見逃してしまうことも少なくない。交換日誌をはじめとする生徒の声を集める技法を習得することも教師にとっては必要不可欠なことである。このことがいじめや自殺のみばかりでなく、その他多くの問題を未然に防ぐ糸口になることもあるからだ。

また教師は、多様な状況に適した工夫を絶えず実行していくことができるアイディアマンでもあるべきだ。そのため、授業形態も班別討議等を組み込んだが、付箋紙を使った班別討議などの具体的方法も例示した。交換日誌とともに将来の自分が使える技として身についたかどうかを成果としても判断したい。

#### (6) サブテーマ⑥ 進路指導・キャリア教育の意義・課題等を研究する

学生たちは、小・中・高を通して自分が実際に進路指導を受けてきた。しかし、生徒指導が一部の問題行動をする生徒への指導だけではないことと同様に、進路指導が単に就職先や進学先を決めたい者に対する指導ではないことを、現時点で明確化させておかなければならない。大学を卒業して教師となったら、20歳代の若手教師であろうが、50歳代のベテラン教師であろうが、担当生徒にとっては一番身近にいる相談相手ともなる。そのことは進路に関する相談にしても然りである。現場では当然、若手教師は経験の少なさのために、相対的に優れた相談相手になれない場合も多くあるが、生徒にとってはそのことは大きな問題ではない。相談内容に答えられないことも、時間をとって調べなおして回答してやる姿勢があれば、その熱意は、即答できない劣勢を

補って十分余りある。それよりも教師への相談内容が固定化されることが大きな弊害を残すことがよくある。一例をあげれば、どこに進学するかばかりではなく、進学先での適応や本人の進路先での進歩に関する相談も進路指導の大きな一部である。進路先のことは進路室で相談しという意識の教師には、たとえベテラン教師であっても真の意味での進路指導は期待できない。

そこで本授業では、「進学先の向こうにある社会」を強く意識させることの重要性を重んじ、キャリア教育の新しい基礎的・汎用的能力の理解を中心に学習した。

### 3 授業の展開

2で述べた授業のサブテーマの到達目標を達成するための「生徒との交換日誌」や「通信」は、授業内容と連動させながらも、毎時間、ルーティーンとして実施した(表2参照)。併せて授業の内容理解や目標に加えて、学修・育成したい内容もあらかじめ決めておくように工夫した。

表2

授業回	生徒との交換日誌	通信	交換日誌・通信を通して学修させ、育成したい内容
1	交換日誌の趣旨説明	第1, 2号 先輩教師の実践例	実践例を通して生徒指導観を考えるスタートとする。
2	生徒指導に関する「不安」について 学生→教師へ提出	第3号 先輩教師の実践例	① 将来、教師として生徒指導を実践するときの「不安」に対して考察を加える。 ② 生徒指導の意義や原理を教師の立場のみならず、多角的に理解する。
3	一覧(①～⑥)にまとめて提示(次週までの課題) 教師→学生(全体指導)	第4, 5号 教育とは別の職種の人の意見を知る	
4	一覧(①～⑥)に対する自己の意見 学生→教師へ提出	第6号 不安などに対する心構えの別側面を学ぶ	① 他者の意見を通して自己の生徒指導に対する不安について考察を加え、生徒指導上の課題への対応の視点や切り口を理解する。 ② 教師と学生及び学生間での意見交換を重ねることにより、日々の生徒指導の在り方等を研究し、具体的手法を学び、自分に合った方法などを取捨選択していく。
5	一覧(①～④)にまとめて提示(次週までの課題) 教師→学生(全体指導)	第7号 「現代の若者の幸福観」に関する意見を読む	
6	一覧(①～④)に対する自己の意見 学生→教師へ提出	第8号 「教師像」を多角的に研究する	③ 生徒指導が問題行動に対する指導ばかりではなく、「生き方の指導」でもあることを、交換日誌や通信を通して実感する。
7	学生に教師の意見を返す 教師→学生(個別指導)	第9号 同上	
8	教師の意見に対して各自の意見を提出する 学生→教師へ提出	第10号 同上	④ 交換日誌を通して、教育相談体制の理解に役立てる。また通信等を通して、言語環境整備の大切さや、言葉の大切さを理解する。
9	学生に教師の意見を返す 教師→学生(個別指導)	第11, 12号 同上	
10	個別に意見交換を継続する	第13, 14号 道徳に関する教材を読む	① 学習指導要領等やキャリア教育の理解と連動させ、将来担任となったとき、どのような集団指導を実践するかを研究する。 ② また、個人指導における深いかかわり方がどのようなものであるかを理解する。 ③ 道徳教材を通して、生き方の指導の実践ができるようになる。
11		第15号 同上	
12		第16号 同上	
13		第17～19号 同上	
14		第20～26号 同上	
15			

#### 4 生徒指導を理解するための学生・教師間の交換日誌の実際

『生徒指導』の企画立案や実務ができるようになる」という目標を達成させるために、講義教材理解に加え、特異な試みではあるが学生自身が抱く生徒指導に対する不安からスタートして、その対処法などについて意見交換をしながら自己の理念の確立を目指す手法を試みた。まずは講義の冒頭で、「将来、教師（等）となったとき、生徒指導に関して不安なことはあるか？」（本講義には将来SC・SSW・PSW等への進路希望を持つ学生もいるため教師（等）という言葉を採用）という投げかけをし、それに対する意見を土台として、教師による学生への全体指導や個人指導を組み合わせる展開し、そのことにより、教師を介して学生同士が紙面上で意見を交換できるという形式を採用した。

次の表3に先述の学生への投げかけに対する回答、つまり学生が抱く不安の内容を類別した。その作業の中で学生の全体像が窺い知れるが、その軽重はあってもほとんどの学生が不安を抱いていることがわかる。また、教師を志望する大学生にとっては、時代は変遷しても将来に対して不安を抱くという部分においては何ら変わりはないことも窺い知れる。ただ情報化や科学の進歩による時代の変遷に伴う生徒指導に対する考え方や方法が時代遅れになることを防ぐ努力を、怠らぬことを肝に銘じておくことも忘れてはならない。

表3

分類	学生が回答した「不安」の内容
① 自己の能力	私は生徒指導で、生徒に厳しくできそうにない。自分の指導にのってくれるのか。
② 問題発生時の対処	聞き分けのない生徒・聞く耳を持たない生徒・指導した時無視されたり反抗的になる生徒・暴れているときの男子生徒の対処の仕方の指導法など
③ 一人ひとりの観察	一人ひとりを見ていけるか、生徒の変化に気づけるか、生徒の性格に合った指導ができるか。
④ 信頼関係の構築	生徒・保護者との信頼関係の築き方、指導することで生徒に嫌われたり離れていったりするのでは。
⑤ 全体指導と個別指導	クラスをまとめられるのか、全体指導と個別指導の区別はどうしたらいいか。
⑥ 業務別生徒指導	SSW、養護教諭、担任などいろんな立場での生徒指導の在り方

学生は配布された表3を見ることで、他の学生がどのような不安や考え方を持っているのかを知ることができるが、その後の交換日誌の中で、各自意見は深化され、他者の意見と比べて自分の意識の薄さを述懐するものもある。時には自分にはない考え方に触発され、改めて教職という職業の崇高さを実感する場合もある。この交換日誌初期の段階の意見の交換が、個々の意識を変革させ、生徒指導における実践に真摯に向き合おうとするスタートになるものだと筆者は考える。

次に学生は表3の①から⑥のうちの一つにポイントを絞り、意見を出す。それをまとめたものが表4である（⑤⑥をについて回答したものはゼロであった）。その後学生は表4の中から自分で選択した項目に対する意見を書き、以後順次教師と学生のやりとりが始まる。その一連の流れの中で、学生は自分の思索を深めていきながら、将来における教師と生徒とのコミュニケーションの取り方などを研究していく。

表 4

\*実際の類別表から一部分を抜粋したものである

		学 生 の 意 見
① について	1	今は無理して子供に厳しくしようとして、それができないことを不安に思う必要はないということに気づきました。生徒たちも「この先生一生懸命だなあ」と思って自然と反発的な態度もとらないのではないかと思います。また年をとるにつれて、生徒に対し、親のような感情が湧いてくると思います。親ごころになって生徒と接することで、どんなに反抗されたりきついことを言われても、ひるまないとします。
	2	厳しくするだけが指導ではないので、自分のやり方を見つける。分からないなら、基本的な型にはめて指導を試みる。人を頼ったり、模索してみるのも大事。
② について	1	聞く耳を持たないということは、聞いてくれない理由が指導している人にあるんだと思います。まずは話を聞いてあげることが一番だと思います。暴れている男子生徒に女性の先生が一人で対処するのは難しいと思います。男性の教師やカウンセラーの手を借りるのも一つの方法だと思います。
	2	中には反発的になる生徒もおり、先生は私たちのことを思って叱ってくれたりするのに、どうしてそれがわからないんだろうと感じていました。特に暴れている生徒の対処については難しいと思います。日本は担任の負担が他国と比べて大きすぎると聞いたことがある。担任以外に話せる人、相談できる人がいて、クラスに話す時間を定期的にとることで生徒の心も落ち着き不安感や悩みが減るのでは。
	3	聞く耳を持たない生徒にも、まずはきちんと話すことが大切だと思います。生徒に嫌われるくらい熱心に指導すると生徒も少しは自分の話をしてくれると思います。
③ について	1	クラスの中には目立つ生徒ばかりではないので、一人ひとりに気を付けて小さな変化にも気づく目を持たなければいけない。気づいた後の生徒への接し方を間違ひそうまで心配だ。失敗は許されないとと思う。
	2	一人ひとりに合った指導をしたり変化に気づいたりするには、一人ひとりを見ている必要がある。心に余裕を持つことが大切だと思います。毎日「自学ノート」などに日記を書いて、生徒の変化に気づく先生、掃除や休み時間にクラスを見に来ている先生がいました。
	3	ボランティアなどで実際に子供たちと接する機会を増やして全体を観れるようにするなどが大切です。生徒の性格だけでなく、その時の生徒の心の状況にも配慮しなければならないと思います。
	4	大人数の場合でも、生徒一人ひとり違うので、それに合わせた指導が難しいと思います。預かっている以上、みんなに目を向けて、把握しないと保護者にも報告しないといけないので、休み時間、給食、先生同士の連携で情報交換など生徒をしっかり観る努力をしないといけない。時には子供目線で考え、子供たちの「素」を観れるようにしなければならないと思います。先生が行動して、手本になって、一生懸命に向き合えば生まれてくるものもあると思います。
④ について	1	「熱意＝優しさ」だと思っている。指導した時すぐに感謝される熱意と、もう一つ「これから先いつか感謝される熱意」が大切だ。生徒がいてこそその教師。だから私は後者に重視して生徒指導を行うべきだと思う。それは親が子を育てる様に似ている。しかし、熱意が足りない教師が多いと思う。免許取得方法の改善が解決策の一つになるとも思っている。
	2	生徒や保護者と信頼関係を築くためには、嘘をつかないことだと思います。たとえ言いにくいことがあってもそれをうまく伝える術を持っているのが教師だと思います。教師に必要なものは「勇気」だと思います。生徒指導をして生徒に嫌われないということはないと思います。しかし嫌いの先に信用というものがあると思います。指導をするのはその生徒に期待を持っているからであり、その子はまだまだできると思っているからだと思うからです。
	3	わかりやすく楽しい授業をしてくれる先生には、生徒はついていこうと思ったり、魅力的に感じてもらえると思う。保護者との信頼関係を築くには、学級通信を通して関係性を高めていくことができる。生徒からの評価におおそれず、指導しなければいけない場合は、指導していくべきだと考える。

これまでで教師と学生間の交換は3往復を重ねるのだが、その後は教師対個々の学生との交換日誌へと続いていく。先述したように、交換日誌の初期段階においては教師が学生の意見を吸い取って、広く皆に広報し、個々がその多様性や類似性を読み取って自分の考えを深めていく。しかし、例えば「他の学生の不安を知って自分もそうだ」というだけで思考を終えてしまっても、将来の実践には役立たないばかりではなく、逆効果ともなりうる。

そのため、その後の交換日誌は教師と学生個々のやりとりという形式に変え、教師経験者の意見が提示できるようにした。それは学生の意見はどれも熱意にあふれ素晴らしいものではあるが、アマチュアの段階の者同士の意見交換にとどまらざるを得ないからでもある。併せて先輩教師の成功例や失敗例を提示してやることで、学生は自分の性格やタイプに合った生徒指導の姿を次第に形成させていくことができるようになると思った。次にその一例として2人の学生とのやりとりの一部を掲載する。学生の生徒指導に対する意見が深化されていくことが窺える。

#### 【男子 中高英語教員免許取得希望】

〈学生→教師〉

「私は③-1について話したいと思う。③では主に生徒の対応についていろいろと意見が述べられていたが、①では『失敗できない』という意見が書いてあった。私はそれはどうかと思う。人の行動は計算で絶対的な可能性を出すことはできないし、先生も生徒と同じ人間であって、失敗はする。確かに『許されない』部分はある。しかし、それを気にしたところでどうにかなるようなものが生徒指導であるとは思わない。結局は、生徒を思いやり、善悪の判断をして、その善悪（この2つに当てはまらないものもあるが）の両者を和解させることが理想であると思う。その中で「生徒を見る観察眼を鍛えることが重要だ」と②の中に書いてあったが、それ以前に、今の若者は忍耐力が必要だ。したいこと以外を中途半端にやる傾向にある。するなら全力です、その気概を生徒指導するうえで大事にしてほしいと思う。

〈教師→学生〉

「あなたの『熱意=やさしさ』『いつ感謝されるのか…』という意見がみんなの中で多く取り上げられていました。良い提案をしてもらったと、うれしく思います。私もこれまで多くの先生と出会ってきましたが、生徒に好かれる先生も大別すると2つに分かれます。つまり、生徒に『迎合』ばかりしているので『物わかりがいい先生』として好かれるタイプと、嫌われていそうで真には尊敬され、頼られ、好かれるタイプです。どちらがいいかは明白で、その『迎合』こそが忍耐力養成を邪魔するものなのかもしれません。」

〈学生→教師〉

「今回は『物わかりがいい先生』ということ先生が述べていたのでそれを取り上げて話そうと思う。私が思う『物わかりがいい先生』というものにも2種類いるのではないかと思う。それは「自分が自分自身の軸となって、そこから生徒の話を聴いてフレキシブルに対応、またはその軸に取り入れることができる先生」と「その軸が弱いせいで生徒にとって『物わかり（都合）がいい』先生」だ。そして私たちのような教師の卵たる人たちが後者のような先生にならないために、私たちがすべきことがある。

それは様々な経験を積むことだ。それでこそ、やっぱり体験実習での経験は本当に教師になる前の唯一の実践なのですごく大事だと思う。ここですべてを吸収することはできないが、ここでどれだけ頑張るかで先生としての出だしが違おうし、出だしが違えば、これから先の先生としての在り方も違う。私たちが『生徒にとって都合の良い教師』とならないようにスタートダッシュをほんとうに大事にして、真に必要な教師になりたい。」 以下略

#### 【女子 高校公民、特別支援学校教員免許取得希望】

〈学生→教師〉

「私は③-4はとても重要なことだと思います。学校には様々なタイプの生徒がいて、少し強く指導した方がいい生徒、やさしく指導した方がいい生徒がいると思います。例えば、子供が何か悪いことをしてしまった時、もちろん教師としてはそのことを叱らなければなりません。でもその悪いことをしたということだけを叱るのではなく、その背景に何かあるのではないかと考えることも必要だと思います。もしかすると、何か悪いことをして、先生と話すきっかけを作ろうとしたり、先生に何かを気付いてほしいサインかもしれないからです。悪いことをしたら叱るのは、大切ですが、叱った後のケアも大切であると思います。また教師が生徒を叱るのは、生徒によくなってほしいということは気づいている生徒もいると思います。でも、みんなの前で派手に怒られたり気に障ることを言われてしまって傷つくこともあると思います。叱るときのTPOも重要だと思いました。

〈教師→学生H〉

(下線部を指して)まさにその通りだと思います。私もこれまで何人もの先生たちと出会ってきて、その誰一人として、このこと(下線部)が分かっていない人はいなかったように思えます。しかし、実際にそれを実行できない人も少なからずいたというのも事実です。では、なぜ叱る状況を見極めきれない先生がいるのでしょうか?それは抽象的になりますが、「愛情、やさしさ、思いやり、人の立場に立つ」そういうものが足りないのです。自分の自己満足で叱っても生徒の心には響きません。叱る目的は生徒が良くなることであって、自分のイライラがスカッとすることではないのです。とっても簡単なことですよ。でもこんな簡単なことが分からない先生がいることが残念なことです。

学生→教師

「先生が書かれている通りだと思います。先生も一人の人間というところは生徒と変わらないのであって、例えば、授業中ずっと話している生徒がいたとして、注意する場面で、なぜ注意するのかと考えたとき、①話している生徒が後先困る、②先生自身が周りが話されると話しぶらい、の2パターンが考えられると思います。その時に②の方が先生としても強くなってしまふこともあるように思います。しかしこれではさらに生徒の反発を招くことにつながると考えます。まず、叱るといふときには、教師が生徒に一方向的に注意しているだけが多いと思います。だから先生が言うことにただうなずいて、思ってもいないのに(思っている人もいるとは思いますが)謝って終わっていると思います。でもそれでは本当に先生が言っていることに納得したかわからないと思います。叱るときは教師からの一方向的な注意で

はなく、双方向のコミュニケーションを大切にして、生徒が納得するまで話すことが本当の指導だと思います。」

教師→学生

「私も『周りの生徒に迷惑』のことだけが先行してしまうことがよくありました。『これではいけない』と思いついながらも、ついそうしてしまう自分がいました。また、若いころは力で抑えていたような気がします。今非常に反省しています。もう私のことは取り返しがつかないので、せめてあなた達若者には、あなたが言うような『双方向のコミュニケーションを大切に…』をしっかりと取り組んでいくことを願っています。 以下略

## 5 おわりに

講義の目標達成のために、6つのサブテーマを設ける形式を採って授業改善を図ったが、テストの解答や交換日誌および授業に対する感想などから判断すると、学生は一様に、現段階における自己の生徒指導観を構築したと思われる。また、評価アンケート調査結果（表5）から、授業に対する熱意や意欲も評価してもらっているように感じる。それは授業内容を教職に就いた時に直面する実用的なものに近づけたからであろう。これからも本学の特徴である学生一人ひとりに手厚い対応に心掛けていきたい。

表5 授業評価アンケート調査結果（履修者数27人、回答者数27人 5段階評価）

事前学習・事後学習についての説明は十分でしたか	4.9
事前学習・事後学習の課題は授業に有効でしたか	4.7
授業は『講義概要（シラバス）』に沿って実施されましたか	4.8
授業で、先生の熱意や意欲は感じられましたか	4.9
先生は、授業を分かりやすくする工夫をしていましたか	4.9
質問した時に、適切に答えてもらいましたか	4.8
授業中は勉強に集中できる雰囲気でしたか	4.9
全体として、この授業は有意義でしたか	4.9

今後の改善課題としては、従前の講義中心の授業から一步前進して、アクティブラーニングに連結するような授業を心がけていくべきであろう。そのための計画としては、授業内容を精選し、学生による発表の場を設ける機会を増やすなどして、表5中の評価の低い「事前学習・事後学習の課題」としてレポートを課す方法を研究したり、学生の質問の機会を増やすことによって、適切な回答を含む学生とのコミュニケーションの深化を図る予定である。

また交換日誌・通信に関しては、「先生になったときも役立ちそうです。」「ずっと保管しておきたい。」「次の学年にも通信を出してほしい。」などという感想をいただき、改良を加えながら今後も続けたいと思っている。